

昭和三十年度

眞宗同學會大會紀要

十住毘婆沙論と易行品

特に易行品生起の由來を

求めて

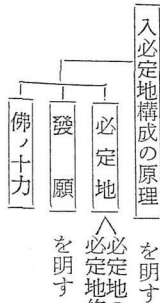
上 杉 思 朗

一、「入初地品」以下八品の構成上よりみた「易行品」の位置

④、「入初地品」以下四品の趣旨とその

關連

各品の論旨の上からみると次圖の如く領解される。



「入初地品」の意趣は、『入必定構成の原理』として『必定地』『發願』『佛ノ十力』なる三概念の相依相成的關係を示すにあり、その三概念と、「地相品」以

下三品との連關は、圖示する如く「地位」そのものの様相の原理的當爲相を説いたものと解される。若し「論」一部の根本趣旨を『初地に入る』といふ『入』の實踐態を明すにありとみる限り、いはば『入』の果相を示したものとみれば、いはば從來これらの論説を直に難行道を説いたものと解して來ているが、それは難行・易行以前の原理的基本法相である。それを難とするも易とするも受機の態如何による。かくみるのが四品の説相に親しい觀方であつて、その原理的基本法相が如何に身證されるか、この一事こそ「論」の根本課題であり「論」の語らんとする本意であらねばならぬ。

「發菩提心品」以下四品の論旨を検討してその趣旨を探ると、四品の論旨の連關は次圖の如くまとめられる。

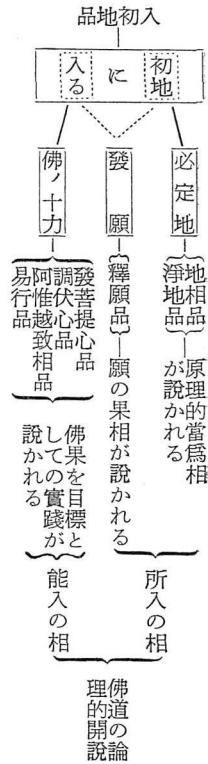
これを前四品の論旨に望め合せてみると次圖の如く示すことが出来る。

能入の相を明すとみられる四品のうち「調伏心品」は「發菩提心品」に攝められてよい内容のものであり、「發菩提心品」は「阿惟越致相品」に歸すとみて差支へない性質のものである。それは實踐に重點がおかれる限り、『必成』の發心は必ず『阿惟越致』を成ずる『實法』の習修を履行すべく、不退への修法を説くは正しく「阿惟越致相品」からであるから……。しかして「阿惟越致相品」に説かれる『入必定』の修法は、『信解空法』の勸勵に外ならない。その『信解空法』の實踐問題から次の「易行品」が展開しているのである。

「阿惟越致相品」の位置を右の如く領



④「發菩提心品」以下四品の趣旨とその連關



解してみる時、この品の論相には今一つ注意すべきことがある。それは、この品に説かれる『信解空法』の『空』の説示が『空義』の面より語られていて、それは「地相品」「淨地品」に説かれた（所入の相）ものと同質のものであるといふことである。「地相品」「淨地品」の論説は、畢竟するに世俗諦成就の様相（空義）を菩薩の人格に於て語つていと考へられるが、「阿惟越致相品」の『空』の論説は正しくその成就する道を示すのである。故にこの品は「地相品」以下三品を受けたとみてよいと同時に、「地相品」等の所説は、「阿惟越致相品」によつて如實にその意義を全うするといはるべき面を持つていのである。これが「阿惟越致相品」の『信解空法』の勸勵である。されば『信解空法』こそは前諸

死品の活にかかわる眼目であり、その成不成は「論」一部の中心問題である。この『信解空法』の實踐問題から易行品が生起してくるのである。

尙各品の論旨に就ては、大谷學報、第三十四卷、第二號、第三十五卷、第一號及び近く發行さる豫定の第四號の所載の拙論を参照されたい。

### 説一切有部阿毘達磨思想形成の過程について

櫻 部 建

一般的に言つて、阿毘達磨の發展に就いては概ね三つの段階が考えられている。第一は阿含自身の中に既に教法を整理組織し解説註釋を與えようとするい

ば阿毘達磨の傾向が見られることであり第二はその傾向が發展して遂に阿毘達磨藏を經藏から獨立せしめ、そこに教法の整理、解釋がいよいよ推し進められることであり、第三はその結果阿毘達磨は單に阿含の教法の整理、解釋ということだけに停まらず、その上に壯大な組織的教義體系が打立てられることである。

それを有部論書の發展の歴史の上でながめれば、最も初期の集異門、法蘊の二論はまさしく、右の第一段の直接の延長と見るべきものであり、識身・施設・界身・品類・發智・婆娑の諸論は、その後を承けて種々に有部の教學説を發展させた、右に云う第二の段階に相應するものである。また、心論・雜心・俱舍等の諸論はその有部の教學説を一貫した體系の下に組織化せんとしたもので、右の第三段階に相應するものと考えられる。

このような論書の階層的な發展について有部の教學説の上にももとより發展展開は見られる。しかし、特にこの部派の阿毘達磨論發展の經過の上できわ立つてい